

「匠の技」を継承

アナログ回路の設計自動化ツールの取材 (pp. 71-82) を通じて、アナログ回路設計に対する米国企業と日本企業の姿勢に随分と差があることを感じました。「一般論として米国企業は設計者個人の力量に頼る部分が多い。一方、日本企業は設計環境の構築を急ぐ傾向が強い」(国内半導体メーカーのアナログ技術者)。米国企業では、実力や経験があるアナログ設計者は年を取ってもバリバリ働くことが多いといえます。これに対し、日本企業では実力の有無にかかわらず、基本的には定年が来ると会社を離れます。EDAツールに頼らざるを得ないというわけです。

そんな中、かつての半導体強国「ニッポン」を支えたアナログ技術者のOBなどが集まって、特定非営利法人「アナログ技術ネットワーク」を設立しました。理事長の堀江昇氏は「アナログ回路の『匠の技』を日本の技術者に伝えたい」。熟練技術者の経験を継承しようとする動きはEDAツールだけではないようです。(大石)